

目次

新曲

はの部

葉がくれ	六	花のかがみ	七〇
萩の露	八	花の雲	七三
羽衣	二	花の旅	七五
橋姫	六	花紅葉錦廓(吉原八景)	七六
初がらす	三	葉山八景	七九
初音曲	七	播磨八景	八〇
初若菜	一〇	春遊び	八二
花暦	一三	春重ね	八四
花妻	一五	春の曙	八六
花の宴	一七	春の朝	八八
		春の曲	九〇
		春の栄	九二
		春の調	九四
		春の宮曲	九六

春の夜……………六六
万才獅子……………六六

時鳥(山田流)……………一三〇
本所八景……………一三三

ひの部

まの部

飛燕曲……………九一
常陸帯……………九六

まがきの菊……………一三五
松風(山田流)……………一三六

ふの部

富士太鼓……………一〇四

松島八景……………一四〇

船の夢……………一〇六

松製……………一四一

冬の曲……………一一〇

松尽し……………一四一

芙蓉の峯……………一二三

松の寿……………一四二

ほの部

蓬萊(山田流)……………一二七

松の羽衣……………一四三

蓬萊(生田流)……………一三三

稀の寿……………一四三

磬……………一三四

万才……………一四七

布袋……………一三五

皇国の栄……………一五〇

時鳥の曲(生田流)……………一三七

三九年川……………一五七

みの部

御旗の勲功……………一五八

紅葉の賀……………一六九

三の舟(今様朝妻舟の替歌)……………一六一

やの部

都の春……………一六三

八重垣……………一七三

都土産……………一六五

八重衣……………一七三

宮の鶯……………一六六

八島……………一七一

御山獅子……………一六九

八千代獅子……………一七四

むの部

山桜……………一七五

虫の音……………一七五

ゆの部

虫の武蔵野……………一七九

夕顔……………一八六

めの部

明治松竹梅……………二〇三

夕ぞら……………一八七

名所土産……………二〇七

夕辺の雲……………二〇四

めぐりあふせ……………二一一

ゆかりの江戸桜……………二〇五

もの部

雪……………二一五

紅葉……………二二三

雪の花……………二一四

紅葉尽し……………二二三

弓八幡……………二一六

目次

よの部

横槌……………三六五

吉野山……………三六六

四つの民……………三六七

夜々の星……………三六八

らの部

落梅……………三七二

ろの部

弄斎……………三七三

六歌仙……………三七四

六段恋慕……………三七〇

わの部

若竹……………二六二

若菜……………二六三

若葉……………二六四

鶯の山風……………二九〇

箏唄の修辭法……………二九二

参考文献……………二九五

引用歌・詩・故事・名句索引……………二九七

題 字……………田 辺 尚 雄

〔はの部〕

葉はがくれ

〔大意〕 題名の葉がくれはこの唄の最後の句の「月の桂の葉がくれか」からとったのである。遊女のかり枕をわざとする身のはかなさ、男女の情をうたった唄で、作曲は山田検校である。

それつみ深き女の身あるが中にも川竹の、ひと夜ひと夜のあだ枕、
ほんにしみじみ憂うれや辛つらや、とはいふもののある時は、思ふ男に思は
れて、とけてあふ夜のうれしさは、なににたとへん言ことの葉の、かた
り尽つきずつひきぬぎぬの別れじや、アアあすの日の暮れをまつちの

神かけて、変らぬ色の深緑ふかみどり、ふかき契のなかなかに、しげき人目に
へだてられ、あはでもどした心のうちを、君ならずして誰か知る、
はかなやままにならぬ身を、思ひつづけてひとりねの、あけ行く空
もはしたなく、なくね血をはくほととぎす、月の桂の葉がくれか。

〔語釈〕 「川竹」川辺に生ずる竹。起臥定まらぬことから遊女をいう。「仇枕」はかない添い臥し。「きぬぎぬの別れ」共寝した男女が翌朝各自の着物を着て別れる。要するに男女の相会った翌朝の別れ。「あすの日の暮をまつちの神かけて」日暮を待つに待乳山の神をかけている。待乳山聖天宮は隅田川の西、今戸橋の南にある。「契りのなかなかに」契りが深く仲良い意と却っての意をかけている。「君ならずして誰か知る」古今集、卷一、春上、ともりの、「君ならでたれにか見せん梅の花色をも香をも知る人ぞしる」梅の色も香もよく味わい得る君でなくて他に誰に見せましよう、見せたところで無意味であるから。「はしたなく」無情。「鳴く音血を吐くほととぎす」拾物論に、「子規三四月、夜鳴イナチ達ス且其声哀ニシテ、而吻有クハハレリ血漬ニヒラス草木ニ」。